

## 第2回 国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会 主なご意見

## ■ 梶委員 ビデオメッセージ

【東京文化会館の事例を踏まえ、本施設整備にあたって検討すべき点についての提案】

- ・一人一人のライフステージに寄り添い、誰もが、いつでも、いつまでも集うことができ、人とのつながりや生きがいを感じることでできる劇場として様々な事業展開をしていくことが重要。
- ・事業を展開するにあたっては、様々な機関との連携や優れた人材が重要となる。
- ・人々の拠点となる劇場として、長期的視点で人を育て、劇場自体も市民とともに育っていけると良い。

## ■ 本江委員 事例紹介

【市民施設・文化創造施設（「せんだいメディアテーク」「武蔵野プレイス」「都城市立図書館」「八戸市美術館」）の事例紹介】

- ・既存の伝承施設のパッケージ（映像、展示、資料、献花台）ではなく、災害文化の創造・3.11とそれ以外の災害を知り、さらにこれから起こる災害への対応力を持った市民を育む施設を目指していかなければならない。
- ・決まったスペースが並んでいるだけではなくて、オープンで流動的な空間になっていて、様々なタイプ、違う能力を持った人が行き交いながら作業をするような施設が望ましい。

## ■ 複合施設としての理念について

- ・この複合施設整備の起点が3.11という出来事であるということは、軸として据えるべき。その軸を見失わないようにそのことを理念として位置付けるべき。
- ・空間的な連続性や歴史的なつながり、その2つを1つの言葉で誰もがわかるような理念やネーミング、ロゴを含めた一連のツールを一体に考えることが大切。
- ・日常と特別な時間、過去と未来など、相反する価値が同居する、それがこの施設として重要になる。
- ・市民の方々が中心となり、そこに公がサポートする「市民主体」が望ましいのでは。
- ・一人一人が自分に正直になって感じたことを表現したり、しゃべるところが本当に大事。
- ・時間、世代、人と人、思い、地域と地域を結びつける「つなぐ」「結ぶ」をいう言葉を重視すべき。
- ・ひと、まち、文化などに共通する「育てる」という言葉がキーワードになるのでは。
- ・忘れる、風化するということに対する危機感があり、それに対する抵抗としてこの施設、事業があるのだということがナイーブになり過ぎないような形で理念に織り込まれているといい。
- ・そのほか、重視すべき言葉として、「世界的な」「誰もが」「みんなが」「創造」「学び」「参加」「次世代へ」などが考えられる。

## ■ 複合施設の「目指す方向性」と実現に向けた具体策について

- ・この施設が人間のアティチュード（態度・姿勢）を育てていくという視点が重要。
- ・施設で行われる様々な事業・プログラムの中に、日常の中での平和を構築する一環として「防災」「メモリアル」の考え方が組み込まれると良い。
- ・ポスト仙台防災枠組の中で市がどのような災害文化をつくっていくのかが、大きな検討事項となる。
- ・これまでの仙台市民の積み重ねがあり、そしてこれからの仙台の文化があるというストーリーが具体的に見えるような仕組みが必要。
- ・震災のときの日常性を示すモノや記録などをアーカイブする機能をこの施設に持たせたい。
- ・「新しい広場」として、市民の多様な活動ニーズに対応できるよう、きめ細やかな活動・サービスが提供できる施設を目指すべき。
- ・これまで仙台が育ててきた仙フィルなどのコンテンツを、これからも創り、育み、投資をしていかないとその価値を回収することはできない。その意味でもこの施設は非常に重要。
- ・施設にきた時に「仙台・東北とは何か」という問いが起きたり、考えたり、体現したり、発見することで自分の身にし、持って帰ることができるような場となることが重要。
- ・施設周辺に何があり、体験できるかが与える影響は大きい。青葉山エリアという立地を生かしていく必要がある。
- ・機能を限定しないスペースを、いかに活用へ向けた仕掛けができるのかという点は、全体のコンセプトの中では非常に重要な位置づけになる。
- ・世代を超えて一緒にいろんなものをつくっていける、そういった場にこのホールがなっていくと良い。
- ・両分野でこれまでも実績のある「音楽の力による復興センター・東北」が、2つの施設をつなぐ役割を果たせるのでは。
- ・文化芸術とメモリアルのための施設であるという根幹を揺るがせないことが重要。
- ・文化は人間の生活の本質であり、それが都市の価値にもなる。
- ・世代の違いのみならず、ジェンダーや国籍など次世代の多様性への対策を展示や設備に盛り込んでいくことが重要。誰もが使いやすい施設について、議論しながら実装していくという視点はとても大事。
- ・持続可能な運用方法を考えていくのは大事で、幅広い市民・団体がフリー・オープンに参画できるような、施設運営の次世代型のあり方を模索していくべき。
- ・時間と空間の両方を使いながらハレとケが転換するそれが鮮やかであるということが記憶を埋没させない、常にダイナミックな動きをつくり出すことにつながる。そうした建築、運用ができるといい。
- ・これから起こる災害という「第三の時間」のことも見据え、その時に役割を果たす施設となるべき。